



自画像－自己を見つめる力

校長 三村 孝志

平成31年2月26日から3月14日まで新発田市役所（ヨリネス新発田）7階市民ギャラリーで、「12歳の自画像展」が行われます。二葉小学校6年生が描いた自画像が展示されています。よかったら見に行ってみてください。

自画像といえば、手塚治虫が天井板に描いた自画像が展示されるという報道がありました。手塚治虫、藤子不二雄、石ノ森章太郎、赤塚不二夫など日本を代表する漫画家が暮らしたことで知られているアパート「トキワ荘」の天井板に描いたものです。警視庁の記者クラブに保管されていました（時事通信社が2月20日に配信）。写真を見ましたが、紙に書いたものではないので、独特な味わいがあるように思えました。実物を見てみたいものです。

多くの画家が自画像を描いています。ゴッホ、ルノワール、マネ、モネ、ドラクロワ、レンブラントなど。美術の方面は全くわからないので、調べただけですが、自画像で印象的だったのは、平成20（2008）年に知った夭折の天才村山槐多（むらやまかいた）のものです。村山は1896（明治29）年9月15日横浜に生まれ、1919（大正8）年2月20日東京で亡くなりました。22歳5か月という短い人生でした。



村山槐多 自画像(1918年)

詩作や絵画制作に才能を発揮し、その奔放（ほんぼう）な生き方から多くの逸話を残しています。短い人生を駆け抜けた天才芸術家と言える人です。中学2年生のとき、従兄弟の画家、山本鼎（やまもとかなえ）に感化され、本格的に芸術家を目指すようになりました。村山と交渉のあった高村光太郎は「村山槐多」という題の詩を書いています。その中には「五臓六腑に脳細胞を偏在させた槐多／強くて悲しい火だるま槐多」という言葉があります。直情径行で、過剰な純粋性を持ち、倨傲（きょごう）な面もあったと思われる。激情に突き動かされ驀進（ぼくしん）した村山槐多。1916年に描かれた自画像について、三重県立美術館館長をされた毛利伊知郎さんは「自身の姿を理想化することなく、自己の内面がありのままに荒々しい筆致で表されている。／槐多は、この自画像を描いた数年後、二十二歳の若さでこの世を

去るが、眼鏡の奥の鋭いまなざしは、何物をも恐れず、ひたすら突進する青年のいちずな情念を私たちに投げかけている。」と述べています。

自画像を描くためには、自分を見つめなくてはなりません。鏡に映った自分の顔をずっと見続けるのは、なかなか難しいように思います。年齢のせいもあるでしょうが、今の私は10秒くらいで嫌になります。

似顔絵を描くことを職業にしている人がいます。新潟ではやまだみつるさんが有名でしょう。テレビで知っている人もいられるかもしれませんが、やまださんが言っていたわけではありませんが、似顔絵で「喜んでもらうために有効なのは、こころもち美化しながら描くこと」なのだそうです。わかるような気がします。あまりにも美化しすぎると、嘘くさいし、かといって、リアルに描くとモデルのプライドを傷つけてしまいます。しかし、自画像で、「自身の姿を理想化」して描いたら、その精神的な甘さに見ている人が呆れてしまうでしょう。若く、多くの可能性があるみなさんには、自己凝視する力をつけてほしいと思います。ずっと自分の顔を見ていると、自らの嫌なところ、汚いところ、みじめなところ、知られたくないことなどしか、頭に浮かんでこないかもしれません。しかし、自分が、自分を、どう考えているかを知ること、内面を見つめることは成長するために非常に大事だと思います。

自己凝視は、自己内対話から生まれるのではないかと思います。「本当の自分」とは、どこかに存在する実体ではなく、観念的に創り出した二つの自己の対話から生まれる虚構（フィクション）です。しかし、その虚構は、生きるために必要なものです。「本当の自分」をどうとらえるかは、これから、長い人生を歩むみなさんの、人生に対する姿勢、世界の見方などに大きく関わってくるのです。自画像を描くとは言いませんが、「自分とはどういう人間か」を考え続け、内面を見つめ続ける、孤独に耐える力をつけてほしいと思います。

